

教員紹介



毎回、お茶の水女子大学の教員のご専門や教育観をご紹介します「教員紹介」。今回は、2018年4月に着任された基幹研究院人間科学系准教授 西村純子先生にお話を伺いました。西村先生は、大学院では人間文化創成科学研究科ジェンダー社会科学専攻生活政策学コース（博士前期課程）、ジェンダー学際研究専攻ジェンダー論領域（博士後期課程）、学部では、生活科学部人間生活学科生活社会科学講座のご所属です。

「人にはそれぞれの事情がある」ことに
気づけることが社会学のおもしろさ

Junko Nishimura

西村 純子

Q1 こんにちは。どうぞよろしくお願ひします。先生は2018年4月にお茶大に来られたということで、まず、これまでのご経歴を教えてくださいませんか？

大学院を修了後、多摩地域にある明星（めいせい）大学で初めての専任の職を得て、そこで16年間勤務しました。人文学部人間社会学科所属で、社会学を軸に教育と研究をおこなってきました。毎年ゼミをもっていましたので、気づけばたくさんの卒業生を送り出したことになります。

Q2 社会学がご専門ということですが、社会学といっても範囲が広いですね。特にどのような内容をご専門とされているのですか？

専門は家族社会学です。家族社会学がどのような領域かを、ひと言でいうのは難しいですが、あえていうならば、家族に関わるさまざまな現象を、規範や制度といった社会のあり方と関連づけながら考察する学問領域です。これは家族社会学に限らず、社会学全般にいえることだと思いますが、社会学では個人の行動を、その人がどんな関係性の中で生きてきたかという観点から理解しようとしています。つまり、個人がなぜある行動をとるのかということについて、その人が社会のどのような位置で、どんな人々と生きてきたか、どんな規範の世界で生きてきたかなど、その人が生きてきた社会との関わりから考えようとしています。そのように人びとの行動の背景を考えていくことで、ある

現象の違った側面が見えてきたり、「人にはそれぞれの事情がある」ことに気づくことができるようになったりすることが、社会学のおもしろさだと思います。

Q3 どういうきっかけで、家族社会学の研究を始めることになったのですか？

学生のころから「日本の社会は子どもを育てながら働くことがすごく難しい社会だな」と感じていました。大学卒業が近くなり自分の進路を考えると、会社に入って子どもを育てながら仕事をすることが、簡単にできるというイメージを持つことができなくて、何か大変なことがばかりが自分の頭に浮かびました。そうした社会に大きな疑問をもったのが、研究を始めたきっかけです。そういった問題意識からこれまで、女性の就業とストレスの問題、子どもをもつ女性の就業キャリアなどについて研究してきました。

Q4 これから注目される研究テーマあるいは今後取り上げていかなければいけない研究課題はどんなことですか？

家族社会学としてはたくさんあると思いますが、これまでわたしが取り組んできたことの延長線上でいうならば、母親の就業率が高まる状況の中で、子どもの育ちを親・親族、地域社会がどのように支えていけるか、ということについて考えていきたいと思っています。これまでの日本社会は、保育の充実が叫ばれながらも、子育てについては親族に多くを頼るとい

う側面が強くありました。けれども親族（実質的には、親）は「いつでも・どこでも・誰にでも」利用可能なわけではありません。親族に頼ることができるか、できないかが、親と子どもの生活機会に格差をもたらすような社会になっていくのか、それを考慮したうえで社会的なサポートのあり方について考えてみたいと思っています。

Q5 お茶大生についてはいかがですか？ お茶大生の特徴は何かありますか？

自分の考えを、言葉できちんと人に伝えられる人が多いという印象があります。お茶大の中にいると普通のことのように思えるかもしれませんが、決してそうではなく、そこはお茶大生の強みだと思います。その強みを、社会でぜひ生かしてほしいです。

Q6 最後に、先生からお茶大生に向けて、一言メッセージをお願いします。

どんな小さなことでもいいので、学生時代に、興味をもてること、おもしろいと思えることを見つけて、一生懸命取り組んでみてほしいと思います。学生時代に達成できることは多くないかもしれませんが、社会に出てから、そのかわりが人生を豊かにしてくれたり、導いてくれたりすることがあるように思います。

文責：基幹研究院自然科学系教授
赤松 利恵